

流通科学大学における中国語教育への ポートフォリオの導入

Application of Portfolio in Chinese Education at UMDS

程 遠巍*

Yuanwei Cheng

中国語学習者がより効果的かつ長期的に学習を継続するためには、自己の学習過程を意識化し、自己評価することが有効である。すなわち、学習方法やその結果を振り返り、今後どのように向き合えばよいかを考えることは、中国語学習のモチベーションを維持し、自律学習能力や自己管理能力を身につける上で極めて有効な方法である。

本稿では、流通科学大学における中国語教育へのポートフォリオの導入を検討する。

キーワード：ポートフォリオ, CEFR, 中国語教育, 自律学習

I. はじめに

流通科学大学では、2011 年度のカリキュラムに対応した「英語」向け Moodle を、中国語・フランス語という他言語教育に利用するための環境構築が 2015 年度より開始され、2016 年度に一応完成された¹⁾。中国語科目については、授業外で利用できる教材の配布場所としての利用をメインに、講義内でのタブレット端末の利用と組み合わせて利用する方向で構築を進めている。

中国語履修状況に関しては、2015 年度より選択科目に変更されて以降、履修科目を自由に選択できるというメリットがある反面、学習者の継続性が欠けることになり、受講時間も激減している。このような状況の中で限られた期間内に語学能力を一定のレベルに達成させるとともに認定単位に妥当性を持たせるためには、講義時間外での自主学習が不可欠であると中国語担当教員の藺氏が指摘している。藺氏が担当する GPS クラス（グローバル・スタディーズ・プログラムクラス）では、「アクティブラーニング」、すなわち「教師が一方向的に受講者に知識を伝達する講義ではなく、学習者が主体となって学習内容や問題解決方法などを考え取り組む」授業形式を取ることによって、よい学習効果が報告された。次の段階として検討されているのは、Moodle サイトを利用する「反転授業」の導入、つまり「従来教室で行われていたことを自宅で行い、自宅で行ってきたことを教室で行う教授法」である。具体的な利用方法として挙げられるのは、学習者は授

*流通科学大学非常勤講師、〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

業外の時間で Moodle サイトを使用し、文法の予習、音読練習、ドリル問題による課題提出およびリスニング練習を行うことである²⁾。

外国語をマスターするコツの一つは、学習時間をできるだけ長くすることである。通常一つの外国語をマスターするのに必要な学習時間は 1000 時間以上を要すると言われているが、流通科学大学を含めた多くの日本の大学における初修外国語の授業時間は 90 時間（1 コマ 90 分間×週 2 コマ×年間 30 週）、もしくは 180 時間（1 コマ 90 分間×週 2 コマ×年間 30 週×2 年間）である。そのため、Moodle の導入による自律学習は、学習時間を長くすることが効果的であると考えられる。実際に、流通科学大学における外国語教育での Moodle システムの導入は、授業外での学習者の自習性を高め、外国語学習をより効果的なものにしていくと報告された³⁾。

流通科学大学における外国語学習への Moodle の導入の背景には、「経済と教育のグローバル化」という外因と、基礎的な語彙や文法知識を理解していない学生の増加という内因がある。また、学生に対しては、基礎的な語彙や文法への習熟を図るとともに、単位認定の前提となる授業外での学習時間の確保と、学習習慣の確立を意図していると考えられる。言い換えれば、授業時間外において自律的な学習者をめざすことである。自律的な学習者は、学習の目的を定め、教材や学習活動を選択し、学習を評価・管理することができる能力（知識とノウハウの集合体）を持つということである。学習者の自律学習能力は生得的なものではなく、習得されなければならない。欧州評議会（Council of Europe）によって構築された *Common European Framework of Reference for Languages : Learning, Teaching, Assessment*（『ヨーロッパ言語共通参照枠』、以下“CEFR”と略記）は 2001 年に公開された。それ以降、「学ぶことを学ぶ」ことを促進しながら、学習者の自律を強化するねらいとして登場したツールが、『ヨーロッパ言語ポートフォリオ』（以下『ポートフォリオ』と略記）である。これによってヨーロッパ域内における人々の移動が促進されたのである。ヨーロッパ以外の場所では、とりわけ自律学習能力の養成、学習者の言語学習の方法や能力の評価に関する内省の促進を目指している⁴⁾。日本においても大学の外国語教育における『ポートフォリオ』の導入が報告された。国士舘大学では 2009 年 4 月に、政経、法、文、理工、体育の 5 学部の外国語教育カリキュラムに含まれる英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語、スペイン語、ロシア語、留学生対象日本語の 8 言語を包括する『外国語ポートフォリオ』と CEFR の共通参照レベルに相当する「外国語学習の到達レベル」を導入した。ドイツ語履修者の学生を対象に実施した授業アンケートでは、2 年連続で 7 割～8 割の学生が、『外国語ポートフォリオ』の作成について、自分の学習過程をふりかえり、次の目標を立てることの有用性を認めている⁵⁾。

流通科学大学外国語教育における Moodle システムの導入は、学習時間の確保や学習習慣の確立に効果が認められる一方、実施内容の適切さと評価、および具体的な受講生の履歴データなどの評価作業が課題として残されている⁶⁾。その課題の一部を解決するには、ポートフォリオの導入が有効ではないかと考える。学習者がポートフォリオの作成を通して、自己の学習を自己評価

し学習過程を意識化すること、つまり学習の仕方や結果をふり返ったり、今後の学習への取り組みを考えたりすることによって、学習のモチベーションを維持し、自己管理能力や自律学習能力を身につけることができるようになるのである。そればかりか、Moodle サイトの利用と自己評価の相乗効果も期待できると考える。

次に、欧州評議会が公開した CEFR と『ポートフォリオ』の自己評価について簡潔に振り返る。

II. CEFR と『ポートフォリオ』における自己評価

CEFR の副題が示すように、共通参照レベルは評価基準として利用することもできる。共通参照レベルは、最も初歩的な A1 レベルから最も進んだ C2 レベルまでの 6 段階の言語活動と能力を記述するもので、そこでは学習者は何ができるのか、どの程度まで課題を遂行できるのかについて、レベルごとに肯定的な表現で記述する⁷⁾。伝統的な評価方法には教師や公的試験による評価などがあるが、CEFR で特に強調されているのは、学習者による自己評価である。自らの学習経歴を記録し、学習計画を立てるばかりでなく、正式な教育機関で学習したことのない言語でのコミュニケーション能力を報告することも求められている。CEFR は「自己評価表」を提示し、学習者の能力の 6 段階を 5 技能に対応させている。これにより学習者は、自分の主な言語技能についてそのおおよその輪郭を把握することができる。

自己評価表は、「自分は～ができる」という肯定的で総合的な形式で記述され、学習者の動機付けや意識を高めることをねらっている。これにより、学習者は自分の長所に気づき、弱点を認識し、学習の方向づけをさらに効果的なものにすることができる。その結果、生涯を通して自律的学習者になるよう働きかけるのだ。

なお、自己評価表は『ポートフォリオ』のカギであり、自己評価表の付属として開発された自己評価用チェックリストが、学習者の意欲と学習への参加を促進する手段として効果的に使われている。

『ポートフォリオ』は言語パスポート (language passport)、言語履歴 (language biography)、資料集 (dossier) から構成される。言語パスポートを使用することによって、「言語学習者は自身の言語と文化アイデンティティや取得した言語資格および異言語と異文化体験についてまとめることができる」。また言語履歴は、「学習目標を定め、言語学習や異文化体験を記録し、内省する。その上、学習効果を評価するために使用され」、さらに資料集を使用することによって「言語学習者が過去に習った言語、あるいは現在習っている言語について達成した成果のサンプルを保管できる」⁸⁾。

『ポートフォリオ』は CEFR の共通参照レベルに基づくもので、言語学習者のコミュニケーション能力を 5 つの技能 (聞くこと、読むこと、やり取り、表現、書くこと) に分割した上で、さらにそれぞれを 6 段階に分けて記述した自己評価表を含んでいる。

このような『ポートフォリオ』は2つの機能、すなわち報告機能（reporting function）と教育機能（pedagogical function）を持っている。報告機能とは、言語学習者が自身の第2言語/外国語によるコミュニケーション能力や異文化体験について具体的な証拠を提示するもので、試験や公的機関によって取得した資格を補足する。教育機能とは、学習過程をより透明性の高いものにし、学習者の自律を刺激するものである。この点で、『ポートフォリオ』は自省と自己評価の中心的役割を果たすものであると、欧州評議会は強調している。

『ポートフォリオ』の根本的な目的は、すべての言語学習者の体験に価値を与えることである。そしてまた、個人の使用する言語レポーターがどんなものであろうと、その言語レポーターの多様性を強調することである。

次に『ポートフォリオ』の内容をヒントに、流通科学大学における中国語教育へのポートフォリオの導入を検討してみる。

Ⅲ. 中国語教育におけるポートフォリオの導入

2018年度後期に筆者が単独で担当する予定の「中国語A」のシラバスを参考にしながら、ポートフォリオのサンプルを次に示す。シラバスはテキストの計12課の内容を15回に分け、講義を進めていくように構成されている。そのため、1回の講義内容が終わるごとに、学生自身にポートフォリオの作成に取り組んでもらう。そのポートフォリオは「自己分析」と「自由記述」の2つの内容より構成されている。自己分析とは、毎回の講義終了後、教室での「まとめテスト」を実施し、学習者自身が自己採点する。自己採点の結果は、ポートフォリオを用いて間違った項目をチェックし、今後間違わないようにするには何をすべきかを書くようになっている。さらに、学習者が自分の学習過程をふりかえり、中国語学習について毎回異なったテーマの自由記述文を書くことも設けている。各課のテーマは、次のように『ポートフォリオ』と、大木・西山・グラツィアニ（2013）⁹⁾を参考に設定している。

まず15回の自由記述のテーマを示し、シラバスの第4課を例にポートフォリオの自己分析と自由記述の具体的な項目を示す。

1. 第1課 私の希望
2. 第2課 目標設定
3. 第3課 外国語学習について
4. 第4課 中国語学習について
5. 第5課 英語と中国語学習についての私の考え
6. 第6課 よい言語学習者とは？
7. 第3課～第6課のまとめ 中間試験に備えて

8. 中間試験および中間試験の結果について
9. 第7課 異文化間コミュニケーション (Intercultural communication) 能力
10. 第8課 授業時間外に自律学習することについて
11. 第9課 時間管理能力 (Time management)
12. 第10課 なぜ私は英語を学習するのか
13. 第11課 なぜ私は中国語を学習するのか
14. 第12課 期末試験に備えて
15. 第7課～第12課のまとめ 期末試験の結果について

第4課

Portfolio 1 自己分析

「まとめテスト」の結果についての自己分析

✓	間違いの種類	間違いの数
	人称代名詞	
	数字の読み方	
	簡体字の書き方	
	動詞	
	疑問文の作り方	
	否定文の作り方	
	語順	
	“不”の変調	
	その他 ()	

(2) 今回のテストでは主に次の項目について間違った:

- a.
- b.
- c.

(3) 今回間違った項目は、次の方法でマスターすればいいと思う:

(4) 今回の点数について:

今回__点だったのは、私が_____からだと思う。

Portfolio 2 中国語学習について

① 中国語のやさしいところ

(例:「英語と比べて中国語の・・・・・・はやさしいと思う」)

② 中国語のむずかしいところ

(例:「英語と比べて中国語の・・・・・・はむずかしいと思う」)

③ むずかしいところの克服の仕方

(例:「中国語のむずかしいところは・・・・・・をすれば克服できると思う」)

IV. おわりに

流通科学大学の中国語教育の実を挙げるための一方策として、学生自身による意欲的・効率的・継続的学習が行われるべく、ポートフォリオの導入について検討してみた。

なお、ポートフォリオの導入は、一部の中国語科目で利用されている Moodle システムとの相乗効果も期待できることも付記しておきたい。

英語、中国語、フランス語、留学生対象の日本語やその他の外国語を包括する全言語共通の自己評価用チェックリストの開発など、ポートフォリオの導入の効果についての研究と検証を今後も継続したいと考えている。

謝辞

原稿の確認に当たり、2 人の確認者の先生より大変貴重なご指摘をいただきました。感謝申し上げます。

引用文献、注

- 1) 山本勝巳、藺梅、田村弘行:「流通科学大学における Moodle を利用した多言語学習環境の構築と運用」『流通科学大学高等教育推進センター紀要』第 2 号 (2017) 15-25
- 2) 山本勝巳、藺梅、田村弘行:前掲論文
- 3) 山本勝巳、藺梅、田村弘行:前掲論文
- 4) F.Carton:「言語学習における自律のためのポートフォリオの有用性」(平成 23 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) 研究報告書)『英語教師の成長に関わる枠組みの総合的研究』(2011) 171-179
- 5) 鷺巣由美子:「提案 2:『外国語ポートフォリオ』と到達レベル 国士館大学の試み」Carton 前掲書 (2011) p.198
- 6) 山本勝巳、藺梅、田村弘行:前掲論文
- 7) Language Policy Unit:“*Language for democracy and social cohesion: Diversity, equity and quality 60 years of European*

co-operation” (2014) p.19

⁸⁾ Council of Europe:<http://www.coe.int/en/> Retrieved March 3,2015

⁹⁾ 大木充、西山教行、J. グラツイアニ:『改訂版 グラメール アクティーフ -文法で複言語・複文化-』(2013)
朝日出版社